

鴨東通信

秋

2012.9 No.87



●新連載 日常語のなかの歴史 1
やば【野暮】
三島暁子

●てーたいむ
未来に受け継ぐ正倉院宝物
湯山賢一

●エッセイ
百万遍にて
並木誠士

●リレー連載 世界のなかの日本研究12
アメリカでの日本仏教研究と大学院教育
阿部龍一

●新連載 台湾便り TSUMOTO@Taiwan-Univ.(1/4).....
新たな挑戦
辻本雅史

●史料探訪
恵日寺旧蔵「十二天図」
高橋 充

正倉院 宝物に学ぶ 2

奈良国立博物館編

毎年、正倉院展にあわせて開催される正倉院学術シンポジウムをまとめる。シリーズ第二弾の今回は平成20～22年の3回分を収録。

第1部 正倉院展60回その歴史と未来

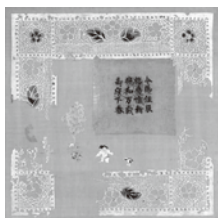
明治期の正倉院―宝物の調査・展示・評価(鈴木廣之) 正倉院宝物の公開 1940/1946 (西山厚) 正倉院の古裂の一般公開―明治・大正時代の古裂整理(尾形充彦) 座談会―正倉院展60回の軌跡(青山茂/守屋弘斎/阿部弘/阪田宗彦/内藤栄)

第2部 皇室と正倉院宝物

奈良朝の宮廷生活(清水健) 孝謙天皇と正倉院宝物(野尻忠) 正倉院宝物の模造―その歴史と意義(西川明彦) 正倉院宝物と宮中行事(米田雄介) パネルディスカッション

第3部 正倉院宝物はどこで作られたか

正倉院宝物を考える―舶載品と国産品の視点から(成瀬正和) 法隆寺献納宝物の製作地について―金工品を中心にして(加島勝) 工芸技法よりみた国産宝物(内藤栄) 正倉院金銀花盤の産地・年代及び模倣原型をめぐって(王維坤) パネルディスカッション



人勝残欠雑張

【10月刊行予定】

▼四六判・三〇四頁／定価三、六二五円

正倉院宝物に学ぶ

奈良国立博物館編

平成17～19年に行われた正倉院学術シンポジウムをまとめる。日々、宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ、東大寺・奈良国立博物館ゆかりの国内外の研究者が、正倉院研究の現在、八世紀の東アジア文化、宝物の保存・伝承の3つのテーマで報告・討論。正倉院宝物の精粹がわかる一書。

▼四六判・四三八頁／定価三、一五〇円



正倉院展

六十回のあゆみ

奈良国立博物館編集・発行



正倉院展 六十回のあゆみ

昭和21年に奈良帝室博物館で第1回が開始されて以来、平成20年で60回を数える正倉院展。その歩みを、各回の主な出陳宝物の図版や特徴・エピソード・出陳一覧などのデータと、各分野の研究者によるエッセイでたどる。

▼A4判・二八六頁／定価三、一五〇円

やば【野暮】

洗練されないさまを意味する語として定着した「野暮」を取り上げたい。「野暮」は当て字とされて語源も定かでないが、一説に雅楽の楽器「笙」との関わりがある。

笙は十七本の竹管と台座となる頭かしら（匏ほう）からなる楽器で、主に合竹とよばれる五・六音の和音によって演奏される。各管の音程は上方に開けられた穴（屏上びんじょう）と、下方に付けられた金属製リード（簧した）との距離によって決まっており、頭に息を出し入れる際に、屏上とは別に開けられた指穴を押さえると該当の管が鳴るという仕組みである。

笙の竹名は千・十・下・乙・工・美・一・八・也・言・七・夕・イ・上・凡・乞・

毛・比で示されるが、也・毛には簧が付かず音を発しない。役に立たない無用の管である也・毛（やもう）が転じたとい

うのが野暮の語源とされる由縁である。
この也・毛の無音化は日本における展開であった。伝来当初の姿を留める正倉院北倉の「呉竹笙」には全管に簧を付け

日常語の歴史 なかの

1

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

た跡があり、また頭の吹口にも長い管（湿度の高い日本に適さなかった模様で早々に廃れる）が付く。平安時代、保延三年（一一三七）に藤原忠実が奉納したと伝わる春日大社若宮の笙（国宝「若宮御料古神宝類」のうち）では、也・毛に簧は無いが、音を発する管であった名残として屏上が残る。

室町時代後期、笙の楽人豊原統秋が編んだ楽書『體源鈔』には、也・毛の両管に麝香じやくかうを入れて用いるという記述がある。南北朝・室町時代を通じて天皇・将軍が学び、権威のシンボルとなった笙であるから、楽器の莊嚴としてそのようなことが行われていたのも頷けよう。また、統秋は三条西実隆たからに葉を調合していたことが知られるので、香りだけでなく生薬としての麝香にも詳しくあったに違いなく、不老不死の音色とでも喻えられたのだろうか、也・毛から

連想が広がる。

笙は霊鳥鳳凰を模したとされるその姿から「鳳笙」の別称があり、不粋な野暮の意とはかけ離れた優雅な和音を響かせる楽器である。秋の夜長、是非とも笙の調べに耳を傾けていただきたい。
（三島暁子・日本女子大学文学部学術研究員）

正倉院展の歴史

正倉院の宝物というのは、ご存じのように、天平勝宝八歳（七五六）に、聖武天皇の御冥福を祈念して、光明皇太后が天皇の御遺愛品などを東大寺の本尊盧舎那仏（大仏）に奉獻したことに始まり、それ以後何回かの奉獻や東大寺の寺宝などを加えて、現在の姿となったものです。

明治までは、朝廷の監督の下に、北倉・中倉が勅封として東大寺によって管理されてきましたが、明治以降皇室に献上される形で、政府の管轄になり、現在の北倉・中倉・南倉全部が勅封になりました。明治五年（一八七〇）に、壬申検査と呼ばれる、正倉院宝物をはじめとする古社寺や華族の所蔵品調査が政府によって行われ、明治二五年には、宮内省のなかに正倉院御物整理掛が置かれます。そこできちつとした調査・整理や修理を行い、宝物の管理がなされてきて、それが今の宮内庁正倉院事務所に受け継がれて現在に至っているわけです。

そういうふうには、きちつとしたかたちで宝物が守られてきたのですが、それが公開される機会は、一般にはなかなかありませんでし

ていたいむ

未来に受け継ぐ正倉院宝物

湯山賢一

（奈良国立博物館長）

た。はじめて一般に公開されたのは、昭和一五年（一九四〇）で、皇紀二六〇〇年の祝賀行事の一環として、東京帝室（現国立）博物館で公開されました。四〇万人以上の人が来館し、長蛇の列を作ったといえます。そのあと戦争がはげしくなり、昭和二〇年近くになつてくると、文化財の疎開ということも考えられるようになりました。正倉院宝物も、校倉の中ではなくにあったときに大変ということ、全部ではありませんけれども、奈良帝室博物館に運んで、こちらで収蔵したのです。戦争が終わったときに、せっかくの機会なので、宝庫に戻す前にぜひとも一般に公開してほしいという要望が多くあり、国民に公開されました。それが昭和二一年の秋で、それが第一回の正倉院展になるわけです。

終戦直後という、食うや食わずの状況のなかで、旅行するのにもお米を持たなければ旅行できなかつた時代です。そういうなかで、全国各地から一四万を超える人がおみえになったのです。日本の歴史・文化には、正倉院宝物というすばらしいものがあるのだということで、敗戦にうちひしがれた人々の、生きる勇気を含めた

大きな応援歌になったのです。そのときは、第一回とは銘打っておらず、続ける予定ではなかったのですが、これだけすばらしいものだから、ぜひとも続けて公開してほしいということで、翌年も国立となった博物館での秋の公開というのが始まったわけですね。

一〇月のはじめに、勅使が下向されて勅封の倉が開けられて、その後に点検・調査・修理といろいろな作業が行われます。一二月のはじめにまた勅使がおみえになってご閉封となります。そのあいだに宝物を博物館に運んで展示させていただく、そういうスタイルが第二回からはじまっているということなのです。

連綿と続く調査・修理

正倉院宝物は、全部で凡そ九、〇〇〇点を数えますが、その点数は毎年増えているのです。それはなぜかと言いますと、宝物のなかには、未整理のものがまだまだあり、それらが調査・修理を経て新たに整理されているからです。たとえば、ぼろぼろになった染織品が大量に伝えられており、それらもひとつひとつ調査・修理し整理されます。また、紙などの素材とあるいは楽器・刺繍などの形態・技法ごとに、特別調査という調査を数か年の計画で行います。私は紙の調査に参加させていただきました。重要な文書にも、漉き返しという技法で作った再生紙が使われていたことから、古代社会で再生紙の使用が広い範囲におよんでいたことが明らかになりました。そういう特別調査や修理でわかった新し

い知見や学問的な最新成果を、正倉院の方々は、毎年の正倉院展のなかに盛り込んでおられるのです。

わざの継承

正倉院展というと、奈良博が出陳作品を選んでいると思ってる人は多いと思いますが、実は博物館は作品の選定にはタッチしておらず、今年何を出すかというのは、正倉院事務所の方でおえになるのです。それは、公開すると宝物に負担がかかりますので、そういった保存上のことや、先ほどいったような、学術的な最新成果を知ってもらおうということを考慮した上で、出陳宝物が選ばれるわけです。

だいたい六〇〜七〇件の作品が毎年公開されますが、そのなか

に、今まで一度も公開されなかった初出陳の宝物が、必ず一〇数点入っています。また、みなさんが大変よく知っている、名品と呼ばれるものは一〇数年に一回出陳されます。二年前の螺鈿紫檀（のぎんびわ）五絃琵琶は、一九年ぶりでした。

正倉院事務所から、今年はどういうものをとってお話がある

と、われわれは、正倉院がどういうお考えでこの作品を選んだのかということをもまず考えます。次に、それをどういうかたちで展示したら観覧者に喜んでいただけ、正倉院宝物を理解しやすくなるのか、また安全に展示できるのか、ということを考えて展示案を作ります。その展示案をもって正倉院とやりとりをするわけですね。基本的に奈良博の考えでいいだろうとおっしゃることもある

し、やはりここはこうしてほしい、となることもあります。そういうやりとりも、現場にとっては、苦勞でもあり、やりがいのあることでもあるのです。

展示計画が固まり、運搬の段になると、奈良博の学芸員が正倉院に行つて、宝物を双方で一点一点確認をします。それが運搬も含めて四、五日かかります。御倉の中で一点一点確認して、確認し終えた時点で奈良博の責任になり、宝物は奈良博の学芸員が全部梱包します。現在の博物館の学芸員は、普通梱包までせず、運送業者がやりますね。正倉院展は全部奈良博の学芸員が責任をもつてやるのです。そこが正倉院展の昭和二十一年から続いている歴史の積み重ねというか、わざの継承なのです。そういうものがないと正倉院展はできません。六〇回を超える歴史があつて、先輩からの創意工夫・努力をうけて、われわれもいろいろな形で工夫や努力を続けているわけです。これがまた次の世代に受け継がれていくのです。

来館者増への対応

私が館長になってからの平成一七年・第五七回展覧会からは、読売新聞社の協力を得ました。大いに宣伝をしてくださいまして、入館者はその時点で前年より一〇万人増えました。今まで正



倉院展に興味はあつたが行く機会がなかったという人の背中を、ある意味では読売新聞社が押してくれたと思います。今も二〇数万人の方が毎年いらつしやいます。

ただ、それだけの方が来館されると、それにともなつて問題が出てきます。一番は何かというと、人の体温なのです。人の持つてくる体温というのはすごいもので、あれだけの人が入られますと室温が上がるのです。室温が上がるということは相対湿度は下がるわけですから、ケースの密閉度がより高くないと、宝物に悪い影響を与えかねません。テストの末に、ドイツのグラスバウハーン社製の最新の展示ケースを揃えました。ケースの密閉度は高く、いくら外にお客さんがたくさん入つても、ケースの中の温度湿度はほとんど変化しません。しかも展示場と展示ケースのなかの温度湿度の状況を、二四時間リアルタイムで監視できるようになっています。その情報は全部正倉院事務所にも共有しています。またケース自体は、ご覧になつたらわかりますが、ほとんど反射しません。ガラスがあるとはわからない、宝物を手でさわれるのではないかと思うぐらいの透明度です。

そういう努力を正倉院にもお認めいただいて、これならば安全だということで、信頼関係や良好な関係が築けていると思います。ただ、それに安住することなく、もっと努力していかないと

いけません。独立行政法人になって、何かと大変なこともあります。これだけ多くの方に入場していただいているので、それをまたいろいろなことに還元していきたいと思っています。

先人の努力を将来へ

一二五六年前に奉納した宝物と、それを納めた木造建築の倉がそのまま伝えられて残っているというのは、世界的にみても例のないことです。正倉院というのはそれ自体が学問対象となる、そういうものなのです。

一般公開の正倉院展に合わせて、学問的なシンポジウムをやると思います、私が館長になった平成一七年に第一回の正倉院学術シンポジウムを行いました。それ以後毎年続けて現在に至っています。今年は一月四日に、「正倉院宝物の近代」壬申検査から一四〇年」というテーマで行います。

その第一回から第三回までの成果をまとめたものが、平成二〇年に刊行した、奈良国立博物館編『正倉院宝物に学ぶ』で、最新の調査成果や、個々の研究者の方が考えておられる新しい説が含まれた、学術的にも意味がある本です。

今回、その続編『正倉院宝物に学ぶ2』を刊行します。本書には第四回から第六回までのシンポジウムをまとめました。特に第六回（平成二二年）のシンポジウムは、「正倉院宝物はどこで作られたか」というテーマで、これこそ、正倉院研究の最前線を示すものだと思うのです。正倉院というと、シルクロードの終着駅

ということ、多くのものが中国・朝鮮・西域から伝わったと思われるがちですが、実は国産が九五%だという、宮内庁正倉院事務所保存課長の成瀬正和さんの研究成果を掲載しています。

当時の日本の人々は、最新の技術文化を輸入して、それをもとに独自技術を発展させたのです。鼈甲べっこうの素材となる玳瑁たいまいという亀がいなければ、仮玳瑁かたいまいといって似せたものを作り上げる、そういう技術が当時できあがっていたのです。八世紀というのは、遣唐使による国作りのなかで、技術的なことも含めて、最先端の国に、追いつき追い越せとはいわないまでも、国作りに一所懸命になっていた時代です。ある意味でその象徴が大仏さんだと思うのです。が、そういうなかで日本の文化的なたちというのできてきたというのは、正倉院からよくわかります。すごい時代だったと思いますし、その時代のものが、きちつとした伝世品として残されているというのは、すばらしいことです。先人たちが努力して守ってきた、そのありがたみをわれわれはきちつと受け止めて、自分たちが正倉院宝物を見て楽しむだけではなくて、これから先の子孫、将来へ残していくという努力をあわせてやっていかなくてはならないと思います。

（二〇一二年九月一三日 於・奈良国立博物館）

百万遍にて

鴨川の東、今出川通と東大路通がまじわるところが百万遍である。

交差点の北東にある知恩寺の善阿空円上人が、元弘三年（一二三二）、疫病流行に際し百万遍念仏を唱え効があったことにより、後醍醐天皇から百万遍の号を下賜されたという伝承がある。

時は流れて一九〇二年の、遅くとも秋に、その百万遍に立つて南を見ると、左手には、第三高等学校の校舎をつかつて講義をはじめた京都帝国大学の理工科大学が、そして、右手には、完成したばかりの京都高等工芸学校の校舎が目にはいるはずだ。京都帝国大学は、現在の京都大学。理工科大学につづき、法科、医科、文科の大学ができていく。一方、京都高等工芸学校は現在の京都工芸繊維大学であり、一九三〇年に現在の松ヶ崎の校地に移転している。

さらに、その五年ほど後に同じ場所に立つと、右手の高等工芸学校の向こうには、京都市立美術工芸学校の屋根が見えたとはいえない。京都御苑内に一八八〇年にできた京都府画学校が、この頃には美術工芸学校となつて、この地で美術教育をおこなっていた。現在の京都市立芸術大学だ。さらにその先には、絵専と呼ばれて

京都の人びとに親しまれた京都市立絵画専門学校が一九〇九年に設立される。

このような風景を思い描けば、大学の町といわれる京都のひとつの核は、この時期、たしかに百万遍界隈にあった。しかし、たんに大学が集まっていただけではない。

一八九七年に創立した京都帝国大学の理工科大学の初代校長は中澤岩太（一八五八―一九四三）。東京帝国大学工科大学の教授として応用化学を研究していた俊英である。理工科大学の学長として赴任したとき、四〇歳になるかならないかであった。しかし、中澤はたんなる化学者ではない。その知識を陶芸などの工芸技法に應用して、伝統工芸が近代化に向かう路線を切り開いた人物である。東京帝国大学時代にすでに東京府工芸品共進会の審査員などをつとめ、その見識を披露していた。

そして、中澤は、一九〇二年に京都高等工芸学校が開校するにあたり、その初代校長に就任しているのである。京都高等工芸学校は、西陣織や京焼といった京都の伝統工芸が近代化に直面した明治という時代にあつて、機械化、化学染料の導入、さらには世

並木誠士

界に通用する新しい図案（デザイン）という動向にどのように対応したら良いかという課題を教育・研究するという目的で設立された。つまり、中澤は、この高等工芸学校長に赴任することにより、よりどつぷりと伝統工芸界にかかわることになるのだ。この転職、中澤にとつては、職場が東大路通の東から西にかわっただけではあるが、京都の美術工芸界にとつては、大きな一歩であった。以後、中澤は、遊陶園・京漆園などで、若手の工芸家と積極的に交流することになる。

この中澤は、一九〇〇年には、京都高等工芸学校の開校準備のためにヨーロッパの美術工芸教育の調査をおこなっている。そして、この年に開催されていた万国博覧会視察のためにパリを訪れていた洋画家浅井忠（あゐい ちゅう、一八五六―一九〇七）に会い、京都の伝統工芸界に新しい図案教育が必要であるという熱い思いを語り、浅井が図案科の教授になるという約束をとりつける。東京美術学校の教授として洋画の本場で研鑽を積むべく渡欧した浅井であったが、アール・ヌーヴォー全盛のバリを目の当たりにして、デザインの重要性に気づいていた。中澤と意気投合した浅井は、一九〇二年に帰国する際には、ヨーロッパからポスターや陶磁器などを高等工芸学校の教材として持ち帰っており、それは現在では京都工芸繊維大学美術工芸資料館が収蔵している。

図案教育を託された浅井ではあるが、その来京は、関西の洋画界にとつても、当然大事件であった。関西で洋画を描いていた人たちは、さつそく浅井のもとに集結することになる。そして、そ

の浅井が住んだのが百万遍の南、聖護院しょうごいんである。百万遍に立つても、浅井が聖護院三六番地の自宅に開いた聖護院洋画研究所が見えたとは思えないが、少なくとも高等工芸学校に出勤する髭面の浅井の謹厳な姿を目にする機会はあったろう。さらに、聖護院洋画研究所の向こう（南）には、一八九五年に岡崎で大々的におこなわれた第四回内国勸業博覧会の折に建てられた美術館の建物が京都市に払い下げられて残されていた。

言えば、この内国勸業博覧会において、輸出に目を向けすぎた伝統工芸は批判されていたのだ。黒田清輝せいけい（一八六六―一九二四）が〈朝妝あさしょう〉を出品して裸体画論争を引き起こしたのも、この博覧会であった。つまり、内国勸業博覧会と美術館のその後も、当然のことであるが、京都の美術工芸界に大きな影響を与えた。そして、一九〇六年には、その美術館の東に関西美術院ができて、浅井が院長となり、関西洋画の拠点となる。

また、浅井とともに開校時から京都高等工芸学校で図案教育に携わり、関西美術院の建物を設計した武田五一ごいち（一八七二―一九三八）は、のちに京都帝国大学の建築学科を創設することになる。武田の姿もまた、百万遍界限ではしばしば見かけられたはずだ。

このように、この時期に百万遍に立つて南を見ると、その景色のなかに、京都の美術工芸の近代化にかかわったさまざまなものが立ち現れることがわかるだろう。

（京都工芸繊維大学大学院教授）

アメリカでの日本仏教研究と大学院教育

阿部龍一

私は東アジアの密教を中心とする教理や儀礼の研究と、密教史を核とした日本仏教史の研究を専攻としている。ニューヨークの

コロンビア大学で教え始めた一九九〇年代の初めごろは、アメリカで日本の密教を専門とする研究者はごく希だった。しかし現在は北米の大学、その他の研究機関で真言密教や天台密教を研究する学者は優に十名を超える。さらに修験道、両部神道、神仏習合、陰陽道などの関連分野をふくめると三〇名以上の研究者が活発な研究活動を展開している。アメリカでの人文科学研究は日本以上に学際化が進行していて、北米での日本学の全体を見通しても複数の学問分野を関連づけ、あるいは横断する研究が注目を集めている。この点で密教は後七日御修法に代表されるような宮中行事を通しての王権との関わり、悉曇文字の移入に伴う仮名文字の発展への貢献、和歌陀羅尼論や古今伝授に見られる歌論や歌道との関連、さらに曼荼羅、祖師像、梵字、法具などの視覚芸術的要素の重要性、弘法大師信仰を好例とする民衆宗教への浸透など、政治史、文学、美術史、民俗学などさまざまな分野からのアプローチが可能である。これも近年アメリカで密教を一つの焦点として

日本の仏教の研究が隆盛に向かっている理由の一つと言えるのではないだろうか。

アイビー・リーグや主要な州立大学のほとんどには東アジア研究専門の学部があり、歴史や文学を中心として日本研究専門の教授陣が近代・近世と中世・古代を分担して教えている。またアメリカの大学では宗教学部を持つものが少なくないので、日本仏教の研究者は、東アジア学部だけではなく、聖書学、イスラム教神秘主義、ヒンズー教の国家主義などが専門の多様な研究者を同僚とする宗教学部に属するものも多い。

私の場合は古巣のコロンビア大学では宗教学部で助教授として教え始め、教授となつてからは宗教学部と東アジア学部の兼任となった。二〇〇四年にハーバード大学に移つてからは東アジア学部の専任として教えている。ハーバードにはキリスト教神学を中心に宗教を教えるデイヴィニティー・スクール（神学校）があり、これと重複しないため宗教学部は設置されていないが、私を含め諸学部で宗教に関わる研究をしている研究者をまとめる宗教学委員会があり、これが学部同様に独自の大学院カリキュラムを持ち、

宗教学の博士課程の学生の指導を行っている。

コロンビア大学でもハーバードでも、日本の仏教を教えていることで、道教、儒教、中国、韓国、インド、チベットの仏教の専門家、さらにアジア以外の宗教に携る学者とも常に交流して、自然と比較宗教的な研究態度を持ってきたことは研究者として幸運であると思う。またハーバードの東アジア学部、美術史学部、比較文学部をはじめ、ボストン市内や近郊の大学にも日本の仏教を視野に入れて研究している学者が増えたこともありがたい限りである。

しかし中国研究に比べると、北米で日本歴史、文学、美術、宗教を学ぶものの数は未だに少なく、学者一人一人の研究の専門化も日本の学界ほどは進んでいない。これは大学院生を指導する上での指導教授の分担範囲が広いことによく現れる。近年に私が指導した博士課程の学生の学位論文のテーマも、院政期の貴顕による金峯山信仰、近世内親王と尼寺、中世南都寺院の法会、江戸中期後期の国学と仏教の交流史など多岐に及んでいる。それによって専門の研究の狭い枠に自分を押し込めないで済むのは歓迎すべきであろう。

大学院生の指導で欠かすことができないのが、日本の研究者の方々から直接指導を受ける経験を持たせることである。二〇〇〇年ごろからは二年に一度のペースで中世の仏教史、文学史、制度史、美術史などを中心とした先生方をお招きし、アメリカの学者と学術交流をすることを意図としたワークショップや学会を催している。このような会合にはハーバードだけでなく他校の大学

院生も極力招くようにしているが、それはアメリカの大学院生にとつて、日本の学者の研究発表を自分の耳で聞き、自分の力で理解し、さらに解釈することが何よりの刺激になるからだ。

博士課程を終えた院生のほとんどは、日本に一年から二年留学し、日本の諸大学で先生方の授業や研究会に参加させていただきつつ、学位論文執筆に必要な基礎史料の収集・調査を行う。その後アメリカに帰国し、だいたい一年前後で学位論文を書き上げながら就職活動を行うケースが多い。うまく就職を見つけてくれれば、アメリカ各地で日本に関する講座を持つ大学が一つ増えることもしばしばなので、指導する側としての責任の重さを感じさせられる。

これは自分が通ってきた道でもあるが、北米で学位論文を仕上げたあとの若手の学者が成長してゆくには、常に日本の研究者の方と交流を持ち、日本とアメリカの学界で共有できる研究態度や問題意識を作り上げてゆくことが重要なのではないだろうか。これまで様々な形でご友誼を頂き、院生の指導でもお世話になった日本の諸大学の多くの先生方に、この場を借りて感謝の意を表したい。仏教研究に限ったことではないが、アメリカをはじめ海外でこれから日本学の諸分野を志す若い世代の研究者を日本各地の学問のサークルに迎え入れ、また彼らとのつながりを足場として海外での研究発表の機会を増やすことで、日本研究の知的交流のネットワークをグローバルに広げていただければ幸いだ。

(ハーバード大学東アジア言語文化学部教授)

史料

探訪

(50)

恵日寺旧蔵「十二天図」

高橋 充
(福島県立博物館 主任学芸員)

福島県会津若松市にある福島県立博物館は、展示を通して福島県の自然や歴史・文化を紹介する総合博物館として、昭和六一年（一九八六）に開館した。今回紹介するのは、開館準備の頃に収集された「十二天図」という史料である。

十二天とは密教の儀式を行う道場の守護神で、方位を護る八天と日月天地を守る四天から構成されている。すなわち、帝釈天（東）、火天（東南）、閻魔天（南）、羅刹天（西南）、水天（西）、風天（西北）、毘沙門天（北）、伊舎那天（東北）、梵天、地天、日天、月天である。

当館所蔵の「十二天図」（絹本着色）は一二幅が揃っており、各幅本紙の法量は、縦九一・〇、横三六・〇センチである。受け入れ後、数年をかけて全幅の修復を終えている。各幅ごとに状態は異なり、一部は剥落等により図像が見えにくくなっているものもある。いずれも立像として描かれ、制作時期は室町時代（一五世紀）とされている。

修復の際にはずされた複数の軸木に、江戸時代の修復時の墨書銘があり、この「十二天図」が、もともと会津に所在する恵日寺（福

島磐梯町）という寺院の所蔵であったことが判明する。恵日寺の宝物の中に一二幅の十二天図があったことは、江戸時代後期に会津藩が編纂した地誌『新編会津風土記』（巻五三）などにも書かれている。

恵日寺（慧日寺）は、陸奥国南部の古代地方寺院のひとつとして、その名が知られている。平安初期に最澄と論争した法相宗僧徳一ゆかりの寺院で、『今昔物語集』（巻一七）にも登場する。また治承・寿永内乱期には、越後平氏（城氏）とともに、恵日寺の僧侶が信州横田河原合戦に参戦している。史跡「慧日寺跡」（福島県磐梯町）では発掘調査が継続して行われ、その成果をもとに、金堂・中門などの建物や石敷広場などが復元され、多くの見学者を集めるようになっていく。

これに対して、中世以後の恵日寺については不明なところが少なくない。まとまった寺伝文書などがなかったため、その実像を明らかにするのは、なかなか難しいのである。そのような状況の中で、この「十二天図」は、室町期の恵日寺の活動を示唆する貴重な史料のひとつといつてよい。この他に、中世後期の恵日寺に関する

主要な史料として、次のようなものがある。①南北朝期頃に制作され、永正八年（一五一一）に高野山で修復したという裏書をもつ「絹本着色恵日寺絵図」（恵日寺所蔵）、②応永一五年（一四〇八）に恵日寺に施入されたという墨書銘のある「絹本着色仏涅槃図」（観音寺所蔵）、③永享七年（一四三五）に奉納された刻銘のある「鉄鉢」（恵日寺所蔵）。ここで詳細に論じる余裕はないが、これらの史料の情報を詳しく分析すると、中世後期の恵日寺は、顕密兼学の道場として、僧侶（衆徒）を中核に、座主や検校など一定の寺内の運営組織を備えた地方寺院であったことがわかる。「十二天図」も、おそらく衆徒が集まる法会などの場において、堂舎の中に掛けられ、礼拝されていたと想像できる。

このような中世以後の恵日寺の存続を支えた背後には、多様な

信仰によってつながる僧俗の人びとの存在があった。たとえば前記した①「絹本着色恵日寺絵図」は、紀州高野山において修復されたというが、おそらく真言密教や弘法大師信仰を媒介とした寺院・僧侶間の何らかのつながりが契機となっていたのだろう。また②「絹本着色仏涅槃図」については、やはり裏書によって元亀二年（一五七二）に表装し直されたことがわかるが、この仕事に携わったのは、京都生まれの岡村という姓の「細工」（職人）の父子であった（父の名は不明、子は藤六）。このことに関連して、「十二天図」の軸木墨書銘のひとつに、慶長六年（一六〇一）の修復を「岡村常玖」という人物が担当したと記すものがあることは興味深い。

この墨書銘は難解だが、恐れずに読んでみると「会津殿ニマネ



「十二天図」のうち「地天」
（福島県立博物館蔵）

キ留ル住」「山城都四丁住人中庵宗元子 岡村常玖 五拾七歳時」となる。「山城都」以下の部分は不明だが、岡村姓の職人の活動という点で、およそ三十年の開きはあるものの、涅槃図修復のケースと関係がありそうである。多分に推測も含むが、京都周辺の技術をもった職人が、会津の領主に招かれて住みつき、恵日寺の仏画の修復に従事したのではなからうか。江戸時代になってからの修復

が、若松城下に住む地元の表具師の仕事になるのとは対照的に、この時期には、より広域的な地域間の技術や職人の交流という環境があり、その中に「十二天図」をはじめとする恵日寺の仏画もあつたということも、あらためて注目されるところである。

福島県立博物館では、今年の一〇月六日（土）から、秋の企画展「会津の寺宝」を開催する予定である。会津には、仏教の諸宗派を超えてつながる会津仏教会があり、その創立一〇〇周年を記念する企画として、同会の寺院の所蔵品に、当館の収蔵品などを合わせて展示公開する。今回紹介した「十二天図」も公開予定なので、この機会にぜひ御覧いただきたい。

《参考文献》

木田 浩「中世の恵日寺——会津仏教文化の再興——」

『博物館だより』七七、福島県立博物館、二〇〇五年
阿部綾子「軸木墨書にみる『十二天図』の修復過程」

『博物館だより』七九、福島県立博物館、二〇〇五年
※『博物館だより』のバックナンバーは、当館ホームページで閲覧できます。

木田 浩「恵日寺資史料の集中期と空白期に関する一考察」

（『福島県立博物館紀要』二〇、福島県立博物館、二〇〇六年）

— MEMO —

福島県立博物館

福島県会津若松市城東町1-25

TEL 0242-2816000

ホームページ <http://www.general-museum-fs.jp>

・JR会津若松駅バススターミナルから

① まちなか周遊バス「ハイカラさん」にて約20分
② まちなか周遊バス「あかべえ」にて約30分

③ 病院循環バス「ひまわり」にて東まわり約15分、西まわり約35分 県立病院前下車徒歩5分

・常設展観覧料 一般・大学生260円
（20名以上の団体は210円）

・休館日 月曜（※月曜が祝日の場合は翌日）
年末年始12月28日～1月4日
※12月18日（火）は臨時休館

・開館時間 9時30分～17時（入館は16時30分まで）

【予告】 2012年10月6日（土）～11月25日（日）
秋の企画展「会津の寺宝」

会津若松周辺の寺院に伝来した仏像・仏画、工芸・古文書など約70点を展示公開。宗派を超えてつながる会津仏教会創立100年を記念した企画

・おもな展示資料

国宝「一字蓮台法華経開結共」（龍興寺）
重文「白銅三鈷杵」（恵日寺）

「金銅製双龍双鳥文磬」（金剛寺）
「厨子入木造盧名盛氏坐像」（宗英寺）

・企画展観覧料 一般・大学生 500円
（20名以上の団体は400円）

高校生 300円（240円）
小・中学生 200円（160円）

1 新たな挑戦

辻本雅史

二〇一二年三月末を以て、私は京都大学を「早期退職」した。定年まで三年を余しての退職である。そしてこの八月一日付で国立台湾大学日本語文学系教授に就任し、ここ台北にやってきた。こちらは九月に年度が始まる秋入学。本稿執筆現在、まだ授業は始まっていない。今回は、台湾大学転任に至った経緯などを記す。大学をめぐる諸問題を考える一つの素材となれば幸いである。

東アジア人文学研究の拠点

初めての台湾経験は、一九九二年、「儒教における近代」と題するシンポジウムへの参加であった。その時、今も儒学を以て現代に思想的に正対している「生ける儒者」がここには存在している事実に触れた。新鮮で肅然とした感動を覚えた。歴史的過去の近世儒学を研究対象としてきた私には、台湾の儒学研究には、また異なった研究の文脈が見いだせると確信した。それから一〇年、二〇〇二年に再び台湾で学術検

討会に参加する機を得た。この地で人文学研究を牽引する黄俊傑^{しやうけつ}台湾大学教授の招聘であった。黄教授は、当時「東亜文明研究中心」を組織され（今はその発展機関「台湾大学人文社会高等研究院」院長）、以後ほぼ毎年のように、私はここの学術会議に参加するようになった。

黄教授企画の学術会議は、東アジアの思想や文化をめぐる主題で、東アジア（日・中・韓）の他、必ず欧米の著名な研究者も招聘され、多様で刺激的な議論が交わされていた。その成果は台大出版中心^{センタ}から次々と刊行され、今や優に一〇〇冊を超えるシリーズを構成している。壮観でさえある。ちなみに二〇〇五年、一カ月の「訪問学人」visiting professorとして滞在中、新たに編んだ私の論文集も翻訳されてその1冊に入れていただいた。台湾大学は、まぎれもなく東アジア人文学研究の一大拠点となっている。その拠点において、私は、世界の著名な研究者たちと出会い、一国を超えた主題で、学術交流を重ねるといふ得難い恩恵に浴したわけである。それ

は私自身の思想史研究のあり方を、外の視点から再点検する貴重な機会であつた。

外国人学生への研究指導

この間、台湾大学日本語文学系の研究者たちとの交流もおのずから始まった。系主任の徐興慶教授との出会いと親交が、はからずも、私の台湾大学転任へのきっかけとなった。日本語しか話せない私が、台湾で教員が勤まることは、もとより想像だにできなかった。しかし先任者がいた。台湾大学日文学系にお勤めの日本文学専攻の日本人教授の存在が、私の背中を押してくれた。

これまで、京大の私の研究室では、常に留学生を受け入れてきた。また北京日本学研究センターで、日本研究を志す中国人大学院生に二つの学期、教える経験もあつた（国際交流基金によるプログラム）。こうした経験により、日本研究を目指す外国人学生の研究指導には、日本人院生とは異なった視点と感覚が必要であること、およびそれが私自身の研究にも生きて返ってくること、こうした点も分かっていた。日本語ができる台湾の学生に、日本語で研究指導することは、これまでの仕事の延長としてイメージできた。その意味で台湾大学での教職に、大きな不安はなかった。加えて、外国人数員が学内の管理運営に関わることも予測できた。

日本の大学現場の変貌

他方、日本の大学の現状はどうか。いうまでもなく国立大学法人化は、大学運営に、企業的発想による組織管理のシステムを導入したことを意味している。各大学の「自由化と個性化」を認める一方で、自由な競争と成果達成度の厳密な評価にもとづくことで、大学は「活性化」すると謳われた。先の大学院重点化により、初年次教育から研究者養成の課程まで、全部責任を持つ体制となり、教員の教育負担が著しく増大していた。そうしたなかでの法人化である。大学の現場が大きく変貌したことは、私が喋々するまでもなく、多くの関係者共通の実感であるだろう。

年齢的に管理職を担う立場を迎え、この数年間、私は「自分の時間を生きている」という実感が次第に乏しくなっていた。還暦を迎えての焦りもあつた。六五歳まで延びた定年まで勤めることが、本当に良いことか、疑問を持たざるを得なかった。定年延長と抱き合わせて導入された「早期退職制度」は、人事の停滞を避けるため、積極的活用が期待された制度であるはずだ。

二〇〇九年末、次期の教育学研究科長職が回ってくることになった。その時、研究科長の任期が満了する二〇一二年三月末をもって退職したい、私はひそかにそう強く願った。京



「椰林大道」と呼ばれている、台湾大学のシンボルともいえる椰子の木の並木道

大でなすべき私の役割も、十分であるとはいえないまでも、
非才^{ひさい}なりにはほぼ担ってきたという思いも、ないわけではな
かった。

国内の私学という選択もあったかもしれない。しかし、大
手の私学は、学生数が多くその授業負担の大きさはしばしば
仄聞^{そくぶん}していた。大手の某私大は毎週一〇コマを越える授業担
当が常態であると直接に聞いた。一方、学生募集に苦戦する
多数の私学の苦労は周知の通り。こうした現状を前に、台湾
大学という場が魅力的に思われた。加えて、所属する諸学会
のこともあった。年齢と立場上、学術団体の役職も少なから

ず担ってきたが、そ
うした学術団体から
もある程度の距離を
保つこともできるだ
ろう。

新たなステージへ

続けたい研究があ
り、かつそれを学生
指導に生かしたい。
そのための次のス
テージを台湾大学と

いう場に見いだすことは、私には最良に近い選択と思われ
た。その意思を台湾大学日文系の主任に伝え、後は彼にゆだ
ねた。採用人事のためにさまざまな審査が繰り返されたよう
かがった。できるだけ「透明性」「客観性」を確保しようと
する採用人事のシステムは、日本とは少し異なっているよう
だ。採用人事は公募が前提。「系」と「学院」、それに全学の
人事委員会という三段階の審査があり、それぞれ外国人を含
む五人を超える外部の専門家の評価書が付されて、系主任か
らの提案が、審査・投票されるという。また直近三年間に学
術単著があることが不可欠の資格要件である。なおここで、
「系」とは、組織構成上は日本の「学科」相当であるが、実
際には系ごとに学舎と事務室が配置され、それぞれ半ば自律
的に動いているから、むしろ日本の学部に近い存在と言えよ
う。そのぶん、組織構成上、日本の「学部」に相当する「学院」
はここでは「学系」の集合体にすぎない。日本の教授会のよ
うな、全教授参加の学院の会議があるとは、聞いていない。
ともかく、無事に当初の願いが叶い、こうして台湾に赴任
できた。これからどのような新しいステージになるのか、こ
ちらの大学事情を含めて、次回以降、報告していきたい。

(台湾大学日本語文学系教授)

書評・紹介一覧 6～8月掲載分		※(評)…書評(紹)…紹介(記)…記事〔敬称略〕
西村茂樹研究	藤村庸軒流茶書 顕岑院本一	
(書)『日本歴史』第771号(菅原光)	(紹)「茶華道ニュース」696号	
中世京都の空間構造と礼節体系	緒方惟準伝	
(書)『古文書研究』第73号(松永和浩)	(紹)「日医ニュース」第1220号	
後鳥羽院政の展開と儀礼	着衣する身体と女性の周縁化	
(書)『古文書研究』第73号(長村祥知)	(記)「朝日新聞」夕刊 6/6	
近世琵琶湖水運の研究	近世史小論集	
(記)「京都新聞」朝刊 7/3(三好吉彦)	(記)「読売新聞」朝刊 6/20	
戦国大名武田氏の権力構造	—茶会記をひもとく—逸翁と茶会	
(書)『日本史研究』第599号(天野忠幸)	(紹)「淡交」817号	
中近世農業史の再解釈	(紹)『月刊美術』442号	
(紹)『地方史研究』第62巻第3号(榎本博)	祇園祭の中世	
織豊期主要人物居所集成	(紹)「京都市報」6/24(川嶋將生)	
(紹)『日本史研究』598号(戸谷穂高)	(記)「京都新聞」朝刊 7/3(箕浦成克)	
近代日本における書への眼差し	(紹)「神道フォーラム」第45号	
(紹)『書 21』46号	阿蘇下野狩史料集	
(紹)『月刊美術』第443号	(紹)「西日本新聞」7/8	
動物・植物写真と日本近代絵画	世界を巡る美術探検	
(記)「産経ニュース」6/17(渋谷和彦)	(書)「聖教新聞」7/25	
室町水墨画と五山文学		
(紹)『墨』第217号		

6月から8月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
増補改訂 新島八重と夫、襄	早川廣中・本井康博共著	1628-4 C1023	1,260	6
阿蘇下野狩史料集	飯沼賢司編	1611-6 C3021	7,875	6
茶の湯と音楽	岡本文音著	1606-2 C3076	8,190	6
訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀	皇學館大学神道研究所編	1619-2 C3021	15,750	7
東アジアの交流と地域展開	北東アジア交流研究プロジェクト 藤井一二編	1639-0 C3022	5,040	7
世界を巡る美術探検	木村重信著	1638-3 C1071	2,520	7
一九世紀の豪農・名望家と地域社会	福澤徹三著	1642-0 C3021	6,300	8
中世文化と浄土真宗	今井雅晴先生古稀記念論文集 編集委員会編	1636-9 C3015	13,650	8
増補改訂 新島八重と夫、襄(2刷)	早川廣中・本井康博共著	1628-4 C1023	1,260	8

6月から8月にかけて刊行した継続図書

シ リ ーズ 名	配本 回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
九条家本延喜式	2	2	巻八～十一	1594-2 C3321	15,750	6
新島襄を語る		別巻1	日本の元気印・新島八重	1634-5 C1016	1,995	6
大手前大学比較文化研究叢書	8	8	比較詩学と文化の翻訳	1637-6 C3090	2,625	7
技術と文明	33	33	17巻2号	1653-6 C3340	2,100	8

(表示価格は税5%込)

▼先日、あるお店から、今後の弊社新刊案内不要の連絡をいただきました。

版元の近刊情報を一元管理していく動きのなかで、日本出版インフラセンターの「近刊情報センター」、大学生協事業連合の「専門書近刊サイト」などがあります。

版元にとって情報発信コスト削減となり、将来、この情報発信のみで出版社営業はOKとされる時代が来るかもしれません。

しかし版元営業には一元管理できる以外の自社本情報があります。欲する人へ、いかに発信するか。やること山積みです。(江)

☆学会出店情報 小社刊行図書を展示販売

※出店日は変更の可能性有

日本史研究会(立命館大学衣笠キャンパス)

10月13・14(土・日)

中世文学会(京都産業大学)

10月27・28(土・日)

中古文学会(大阪大谷大学)

11月3・4(土・日)

▼一二五六年前の聖武天皇・光明皇后からの伝統、明治以来の文化財行政の伝統、昭和二年からの正倉院展六〇年の伝統、さまざまな層の伝統が折り重なり、その間に清新な新しい風が吹いています。正倉院宝物はますます輝きを増しています。(ハ)

▼京都の秋は、一大観光シーズン。秋のお出かけは、少し暑いですが早めの時期をおすすめします。青紅葉と紅葉の両方が楽しめる九月下旬から十月上旬は、比較的ひとけが少なく秋の訪れを静かに感じることができます。ただし虫除けスプレーは必須です。(大)

▼この夏、歴史豊かな滋賀県湖北を旅しました。印象深かったのは浅井氏の小谷城跡。いまは遺構しか残りませんが、当時は二つの尾根を利用した堅固な要塞だったとか。三方を囲む山を見上げれば織田軍を苦しめたもの納得。フィールドワークって大切ですね。(M)

▼仕事で香川県に行ってきました。とても美味しかった、讃岐うどんを食べるのが楽しみです。帰りの高速パーキングエリアで無事に食べることができました。観光も兼ねて今後はプライベートで行きたいなど。(イ)

▼表紙図版「金銀花盤(正倉院宝物)」「正倉院宝物に学ぶ2」より

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん

鴨東通信 四季報 No.87

2012(平成24)年9月30日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

源氏物語 遊興の世界

逸翁美術館・池田文庫編

二〇二二年九月一日(土)～二
月二日(日)と逸翁美術館で開催さ
れる同名展 同日程で池田文庫で開
催される「宝塚歌劇の源氏物語」展
での展示図録。



源氏香之記
(江戸時代・阪急文化財団蔵)



源氏物語八景絵巻部分
(江戸時代・個人蔵)

【9月刊行】

▼A4判・九八頁／定価一、〇五〇円

描かれた『源氏物語』を中心に、雅やか
な世界を現代に蘇らせる。特に物語に描
かれた「奏楽」「舞楽」「碁」など「遊興」
に注目し、屏風や画帖などに鮮やかに再
現された「遊興」の世界をたどる。
また「幻の写本 大澤本源氏物語」や、宝
塚歌劇で演じられた『源氏物語』も紹介
する。

源氏物語 千年のかがやき

国文学研究資料館蔵



館蔵『源氏物語団扇画帖』全54枚をカラーで、あ
わせて近似する源氏絵も掲載。源氏物語がいかに
享受されてきたか、豊富なカラー図版で紹介する。

▼A4判・一六八頁／定価一、九九五円

一千年目の源氏物語

伊井春樹編

シリーズ古典再生①

平成19年に行われた国文学研究資料館主催シンポ
ジウム、思文閣出版・京都新聞社共催シンポジウ
ムをもとに、斯界の識者による源氏物語論を集約。

▼四六判・二五二頁／定価一、六八〇円

日本の心と源氏物語

岡野弘彦編

シリーズ古典再生②

編者が、師である折口信夫が体系化できずに終
わった「いろごのみの道徳」論に向きあい、『源
氏物語』に流れる日本の心を読み解く。

▼四六判・二四六頁／定価一、八九〇円

歴史のなかの源氏物語

山中裕編

シリーズ古典再生③

『源氏物語』のなかに、この時代の世相が、どの
ように反映しているか。編者渾身の『源氏物語』
論と、一五人の気鋭が、最新の研究成果を展開。

▼四六判・三一〇頁／定価二、三二〇円



御堂関白記全註釈

御堂関白記全註釈

〔第2期・全8冊〕

第1期・全8冊

待望の
復刊

山中裕編

第1期、第2期の全16冊が完結したのを機に、入手困難な第1期（国書刊行会・高科書店発行）の全8冊を復刊。なお今回の復刊にあたり、寛弘6年については、初版刊行時の特殊事情を考慮して、編者のもとで註釈部分の再検討を行い、大幅な改訂を加えて改訂版として刊行する。

寛弘元年
寛弘2年
寛弘6年〔改訂版〕
長和元年
長和2年
寛仁元年
寛仁2年
寛仁2年 上
寛仁2年 下
治安元年

二八八頁／定価八、五〇五円
二〇二頁／定価五、九八五円
一七〇頁／定価五、〇四〇円
三〇〇頁／定価八、八二〇円
三九八頁／定価一一、六五五円
二六八頁／定価七、八七五円
一九二頁／定価五、六七〇円
一九八頁／定価五、七七五円

【10月一括配本予定・分売可】

待望の
完結



第1回配本 長和4年 定価六、三〇〇円
第2回配本 寛弘3年 定価五、七七五円
第3回配本 寛弘7年 定価五、七七五円
第4回配本 寛弘4年 定価五、七七五円
第5回配本 寛弘8年 定価六、八二五円
第6回配本 寛弘5年 定価五、二五〇円
第7回配本 長和5年 定価一一、〇七五円
最終回配本 御堂御記抄
長徳4年
長保2年 定価五、二五〇円

本全註釈は永年にわたる講読会（東京・京都）と夏期の集中講座による成果を集成。原文・読み下しと詳細な註により構成。

禁裏・公家文庫研究 第四輯

田島公編

近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第四輯。今回は柳原家旧蔵本、陽明文庫所蔵資料の目録の翻刻も収録。

【既刊】

第一輯 ▼B5判・三九〇頁／定価一〇、二九〇円
第二輯 ▼B5判・四〇六頁／定価一〇、二九〇円
第三輯 ▼B5判・四九六頁／定価一二、三九〇円

栄花物語・大鏡の研究

山 中 裕 著

えい が おおかがみ

『栄花物語』は非常に複雑な本質を有するものである。六国史・新国史および『源氏物語』の後に生まれたものとして、その影響を多分に受けていると同時に、その内容も非常に多くの要素を含んでいる。しかし、従来『栄花物語』はとくに国文学の分野でとりあげられ、歴史学の方面からの研究は少ない。本書は『栄花物語』に内包される歴史書としての特徴を考究し、かつ『大鏡』の歴史的意義についても論究。従来からの歴史物語という分野に収まりきれない可能性を提示する。

内 容

- 序 章 『栄花物語』 概観
- 第一章 世継および世継物語
- 第二章 『栄花物語』 の編纂
- 第三章 『栄花物語』 の歴史と文学
- 第四章 『栄花物語』 と王朝政治
- 第五章 『大鏡』 の歴史的意義
- 第六章 『栄花物語』 の歴史叙述―年記表現の方法―
- 第七章 『栄花物語』 にみる藤原道長の周辺
- 書 評 福長進著『歴史物語の創造』

やまなか ゆたか 一九二二年東京生まれ。文学博士。東京大学史料編纂所教授・関東学院大学教授・調布学園女子短期大学教授等を歴任。
【10月刊行予定】 ▼A5判・四〇〇頁／定価七、五六〇円

古記録と日記 全2冊

山 中 裕 編

従来古記録は歴史学、「かな」の日記は国文学の分野で扱われてきたが、本書では日記という大きな見地から平安朝の古記録と日記文学の本質を解明。
 ▼A5判・各二五二頁／各定価三、〇四五円

平安時代の古記録と貴族文化

山 中 裕 著

古記録・儀式書・かなの日記・歴史物語等の根本史料を基に、摂関政治の本質および年中行事を主とする平安貴族文化の実態を説く。
 ▼A5判・五一〇頁／定価九、二四〇円

源氏物語の史的研究

山 中 裕 著

王朝文化・有職故実研究の第一人者が源氏物語を史的に読み解く。
 ▼A5判・四七〇頁／定価九、六六〇円

平安貴族社会の秩序と昇進

佐古愛己著

律令国家体制が維持されていた平安初期から、平安末・鎌倉初期までを射程として、貴族社会の構成と編成原理を解明する大著。
 ▼A5判・五七二頁／定価八、一九〇円

摂関時代文化史研究

関口力著

藤原道長の時代を中心に引き上げ、古記録・日記類をもとにして、摂関時代全盛期に生きた人物 および彼らをはぐくんできた社会について考察。
 ▼A5判・四八八頁／定価九、四五〇円

思文閣史学叢書

皇學館大学創立百三十周年・再興五十周年記念

訓讀
註釋
儀式 踐祚大嘗祭儀
皇學館大学神道研究所編

◎『儀式』全十卷（平安前期の勅撰儀式書とされる『貞観儀式』とほぼ考定）のうち、現存する巻二・三・四（踐祚大嘗祭儀 上・中・下）は、大嘗祭の具体的な全容がうかがえる最古で最詳の規定である。

◎本書は、皇學館大学神道研究所が、昭和五十年九月、平成二十三年三月の長期にわたり、儀式講読会（のち大嘗祭研究会）で取り組んだ訓読・注釈研究の成果。

【内容】儀式 踐祚大嘗祭儀 上・中・下（原文翻刻・訓読・注釈・校異）／『儀式 踐祚大嘗祭儀』考（加茂正典）／参考図／注釈索引

〔7月刊行〕

▼B5判・九〇〇頁／定価一五、七五〇円

東京国立博物館古典籍叢刊

九条家本延喜式（全五巻）

東京国立博物館所蔵の九条家本延喜式を、紙背文書も含めて高精度印刷により影印出版。朱書き部分は二色刷り。

▼A5判・五四〇頁／各定価一五、七五〇円

【既刊】（一）巻一・二・四・六・七甲・七乙／（二）巻八・十一

〔10月刊行予定〕

第三回配本（三）

巻十二・十三・十五・十六・二十・二十二

日本古代典籍史料の研究

鹿内浩胤著

史書・法制史料・儀式書・部類記などの基本的な日本古代史料を対象に、「文献学的研究」「書誌学的研究」の二部構成で研究の方法論を提示。

▼A5判・三七六頁／定価七、〇三五円

平安時代貿易管理制度史の研究

渡邊誠著

海商の貿易活動を、国家が管理する「制度」を中心にすえて、その消長を明らかにすることで、新たな貿易史像を呈示する。

▼A5判・三九六頁／定価七、三五〇円

王権と神祇

今谷明編

天皇制や大嘗祭などの実態的な研究を積み重ねた論集。国際日本文化研究センター共同研究の成果。

▼A5判・三四八頁／定価六、八二五円

日本古代即位儀礼史の研究

加茂正典著

思文閣史学叢書

大嘗祭をはじめ、剣璽渡御儀礼・即位式といった広義の即位儀礼をとりあげ、桓武・平城朝における即位儀礼の儀式的意味と歴史的意義を明らかにする。

▼A5判・四八〇頁／定価九、〇三〇円

後鳥羽院政の展開と儀礼

谷昇著

後鳥羽院政期の宮中儀式・行事である公事と修法・寺社参詣参籠などの宗教儀礼が果たした政治的役割を個別具体的に検証。

▼A5判・三三八頁／定価六、三〇〇円

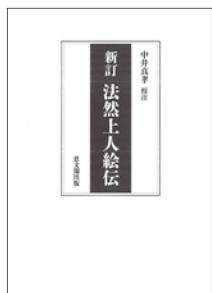
新訂

【9月刊行】

法然上人絵伝

中井真孝校注

法然上人の伝記中、最も浩瀚であり先行する諸伝を集成した『法然上人行状絵図』（浄土宗総本山知恩院蔵・国宝）の詞書を、著者の長年にわたる法然伝研究の成果をもとに、新たに校訂を施した本文と、簡潔な語注によって提供する平成版定本。法然上人の生涯を原文で味わえる一冊。



なかい・しんこう：一九四三年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程（国史学専攻）修了、文学博士（佛教大学）。佛教大学文学部教授、佛教大学学長を経て、現在、学校法人佛教教育学園理事長。著書多数。

▼A5判・五〇〇頁

定価二、九四〇円

法然伝と浄土宗史の研究

中井真孝著

思文閣史学叢書

都市的な顔と田舎的な体を具有する浄土宗の性格が形成された過程を「法然上人伝」「中世浄土宗寺院」「近世末関係」を軸に解明する論集。

▼A5判・四三〇頁／定価九、二四〇円

大本山くろ谷金戒光明寺 宝物総覧

当山には、仏像・仏画・仏典・古文書など、多くの文化財が蔵されている。約五七〇点の宝物全点をF.M.スクリーン高精細印刷による、オールカラーの大型図版で後世に残す。

▼A4判変・五一六頁／定価二九、四〇〇円



法然伝承と民間寺院の研究

平祐史著

民間寺院に伝わる開創・宗祖伝承、地名、史料等の考察を通じ、浄土宗教義の変容や民俗信仰との関係を解明。民間寺院における近世化の実態に迫る。

▼A5判・四四四頁／定価九、四五〇円

日本近世の宗教と社会

菅野洋介著

奥州と関東を主に、戦国期以降の仏教・神道・修験道・陰陽道等と地域社会とのかかわりを、東照宮や寛永寺といった幕府権威をも視野にいれて考察。

▼A5判・三八〇頁／定価八、一九〇円

禿氏文庫本

大取一馬責任編集

龍谷大学善本叢書29

禿氏祐祥博士寄贈の文庫は、梵文経典や日中の仏書、真宗史・仏教美術に関する典籍、絵画等多岐にわたる。善本に値するものを選び、影印として刊行。

▼A5判・六七四頁／定価一四、七〇〇円

西山浄土教の基盤と展開

五十嵐隆幸著

日本仏教を基盤に日本浄土教の祖師や、浄土宗の開祖法然の浄土教義、さらに門弟の證空や行観を中心に西山教義をまとめる。

▼A5判・三一〇頁／定価四、二〇〇円

中世文化と浄土真宗

8月刊行

今井雅晴先生古稀記念
論文集編集委員会 編

常に日本中世宗教史研究を先導してきた、筑波大学名誉教授・今井雅晴先生の古稀を記念して、国内のみならず海外にもおよぶ幅広い層の研究者が、親鸞と浄土真宗史研究の進展を期した最新研究28本を寄せた大冊。

▼A5判・六五四頁／定価一三、六五〇円

内容

緒言

親鸞伝の新展開

中世文化の中の浄土真宗

空海の御影とその儀礼環境

穢と不浄をめぐる神と仏

覚如と呪術信仰

治病と臨終に対する姿勢をめぐる

真宗三尊考

法然から親鸞へ

建永の法難と九条兼実

法然伝の検討を通して

親鸞の「転入」の解釈学【英文】

悲しき学び

親鸞と良忠—その教化と教説

法然の残影

覚如と存覚のあいだに

三 親鸞の思想

『教行信証』の不思議さの読解（その一）張 偉（同朋大学准教授）

親鸞の「化身土」の「弁正論」の引用について

親鸞の聖徳太子観

親鸞における臨終行儀の否定【英文】

ジャクリン・I・ストーン（プリンスストン大学教授）

山本浩信（浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員）

今井雅晴（筑波大学名誉教授）

今井雅晴

阿部龍一（ハーバード大学教授）

中世密教の視覚性と正統性の関連について

山田雄司（三重大学教授）

小山聡司（二松学舎大学准教授）

飛田英世（茨城県立歴史館首席研究員）

平 雅行（大阪大学教授）

ヒロタ・デニス（龍谷大学教授）

田村晃徳（武蔵野大学非常勤講師）

永村 眞（日本女子大学教授）

市川浩史（群馬県立女子大学教授）

田辺元の「懺悔道としての哲学」における親鸞解釈

末本文美士（国際日本文化研究センター教授）

四 親鸞とその家族

浄土真宗における恵信尼について【英文】

ジェームズ・C・ドビンズ（オーバリン大学教授）

恵信尼と同時代を生きた三善氏

「本願寺」成立の再考

真宗史における善鸞伝私考

存覚、顕密寺院と修学文化【英文】

諸宗兼学及び浄土教聖教に関する一考察

フライアン・小野坂・ルバート（イリノイ大学教授）

五 親鸞とその門弟

初期真宗門徒における師と弟子—門徒形成の契機として—

親鸞門弟中における「沙門」と「沙弥」

佛光寺発展の意義—了源・存覚を中心として—

楠 正亮（興泉寺住職）

六 浄土真宗の展開

本願寺歴代宗主の伝道—善如期から存如期を中心に—

「御文」にみる専修念仏言説の一特質

蓮如の善知識観—中世真宗教学における教導者観の展開—

天文期加賀における「超・本願寺体制」の再検討

北方地域と浄土真宗

今井雅晴先生履歴年譜・業績目錄

編集後記

黒田義道（浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員）

大溪太郎（早稲田大学大学院博士課程）

佐々木馨（北海道教育大学教授）

増補 陰陽道の神々

斎藤英喜著 佛教大学鷹陵文化叢書17 [10月刊行予定]

コロンビア大学での発表を元にした論考「牛頭天王の変貌と「いざなぎ流」を収録して増補再版。疫鬼や式神、泰山府君、牛頭天王、八王子、金神、盤生王、そして式王子、呪詛神たち。彼らは近代社会が封印し、消去した「陰陽道」の神々である。知られざる陰陽道の神々の来歴と素顔を、平易に説く。



【内容】 陰陽道と安倍晴明の基礎知識 方相氏(政事要略)巻二十九より

第一章 「陰陽道」の定義/国家のトップシークレットと「陰陽寮」/安倍晴明は「陰陽師」なのか/「道の傑出者」としての晴明/歴史のなかの陰陽師/本書で出会う「陰陽道」の神々とは(表) 安倍晴明年譜

第二章 追われる鬼、使役される神・疫鬼と式神

第三章 冥府と現世を支配する神 冥府神としての泰山府君/変貌していく泰山府君

第四章 牛頭天王、来臨す 牛頭天王を求めて/中世神話としての「祇園牛頭天王縁起」/牛頭天王、陰陽道の神へ

第五章 暦と方位の神話世界「董靈内伝」の神々「董靈内伝」という謎/暦世界の根源神へ

第六章 いざなぎ流の神々/呪詛神と式王子をめぐって いざなぎ流の神々と陰陽道/「呪詛神」の系譜から/式王子の世界

第七章 「陰陽道」の神々のその後 標的とされた牛頭天王/陰陽道の神々は何を語っているのか 断章 いざなぎ流への「旅」/安倍晴明ブームの深層へ

補論 牛頭天王の変貌と「いざなぎ流」(増補分) さいとう・ひでき…一九五五年生。佛教大学教授。専攻は神話伝承学、宗教文化論。最近の著書に『荒ぶるスサノヲ、七変化』(吉川弘文館「古事記 不思議な1300年史」(新人物往來社) 等。

▼四六判・三一六頁/定価二、四一五円

祇園祭の中世 室町・戦国期を中心に

河内将芳著

祇園会の見物という行為の検討により、その特質をうきばりにし、さらに神輿渡御の神幸路・御旅所と都市空間との関係等についても解き明かす。

▼A5判・三六〇頁/定価四、七二五円

崇徳院怨霊の研究

山田雄司著

崇徳院怨霊を時代背景の中で位置づけ、崇徳院怨霊の跳梁を記す『保元物語』がいかにしてまとめ上げられていったのかを解明する。

▼A5判・三一四頁/定価六、三〇〇円

権者の化現

天神・空也・法然

今堀太逸著

佛教大学鷹陵文化叢書15

日本国の災害と道真の霊・六波羅蜜寺の信仰と空也・浄土宗の布教と法然伝の3部構成で、仏・菩薩が衆生を救うためにこの世に現れた仮の姿について明かす。

▼四六判・三一二頁/定価二、四一五円

太子信仰と天神信仰

信仰と表現の位相

武田佐知子編

時代を超えて、上下を通じた諸階層の篤い崇敬を得てきた、聖徳太子信仰・天神信仰の比較研究。両信仰に関わる美術史、文学史、宗教史、芸能史的研究を集成。

▼A5判・三五四頁/定価六、八二五円

八瀬童子 歴史と文化

宇野日出生著

八瀬童子の関係文書を調査し、民俗調査を行った著者が、彼らの苦難にみちた激動の歩み、そして今に伝わる思想・行動を歴史に裏付けられた「文化」としてとらえた一書。

▼四六判・二一〇頁/定価一、八九〇円

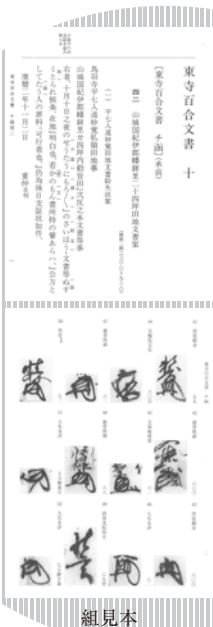
東寺百合文書

京都府立総合資料館編

※東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である（平成9年国宝に指定）。

※本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

※本文組み体裁などは『大日本古文書』本にならない、巻末に収録史料の花押一覧を併載。



組見本

- 第1巻（イ函・ロ函）
- 第2巻（ロ函二）
- 第3巻（ロ函三）
- 第4巻（ロ函四・ハ函一）
- 第5巻（ハ函二）
- 第6巻（ハ函三・ニ函一）
- 第7巻（ニ函二）
- 第8巻（ニ函三・ホ函・ハ函・ト函一）
- 第9巻（ト函二・チ函一）
- 第10巻（チ函二）〔10月刊行予定〕

▼A5判・平均四五〇頁／定価（各）九、九七五円

東寺文書と中世の諸相

東寺文書研究会編

日本の古文書を代表する史料群であり、中世の基本史料である東寺文書。東寺文書に魅せられた中世史研究者により、一九九四年以降続けられた東寺文書研究会での研究成果の第二弾。研究会の報告を基礎に最新の成果を披露した19篇。

▼A5判・六五四頁／定価一一、五五〇円

織豊期主要人物居所集成

藤井讓治編

織豊期を生きた政治的主要人物の移りゆく居所の情報を編年でまとめた研究者・歴史愛好家必携の書。政権の中心人物、有力大名、有力武将、僧侶・文化人、公家、政権に関わる女性たち、総勢25名を収録。

▼B5判・四七六頁／定価七、一四〇円

中世長崎の基礎的研究

外山幹夫著

中世長崎、特に肥前国西南部の松浦郡・高来郡・彼杵郡に着目し、松浦氏・有馬氏などの在地武士団の成立・発展、領国支配の実態や南蛮貿易の推移とその独自性を明かす。

▼A5判・四二四頁／定価七、八七五円

戦国大名権力構造の研究

村井良介著

戦国大名権力の動向は、近世に向けた一貫した過程と捉えることができるのか？主に毛利氏を事例に、戦国大名、「戦国領主」の重層的な権力構造の分析から、戦国期の権力諸関係の特質を、理論的かつ実証的に描くことにより解明する。

▼A5判・四五二頁／定価七、三五〇円

東国における武士勢力の

成立と展開

東国武士論の再構築

山本隆志著

東国武士を武士勢力としてとらえ、京・鎌倉での活動と運動しながら本領で法会・祭祀を主催するなかで政治的支配力を形成していることを、具体的に論じる。

▼A5判・三八四頁／定価六、八二五円

日本中世政治文化論の射程

山本隆志編

筑波大学大学院にて24年間にわたり、中世東国社会史の諸問題に取り組んだ編者。その指導・学恩を受けた16名の執筆による、多岐にわたる研究成果を収録した論文集。

▼A5判・三四四頁／定価八、一九〇円

天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史

三島暁子著

天皇家・将軍家の笙の御師範として重要な役割を果たした地下楽人豊原氏の南北朝から約一五〇年にわたる活動に着目し、公・武・楽家という三者の関わりのなから、権威に密接にかかわった音の文化を論じる。

▼A5判・三六〇頁／定価六、九三〇円

中世蹴鞠史の研究 鞠会を中心に

稲垣弘明著

室町期以降の蹴鞠会の举行形態の歴史を体系的に論じた一書。新興武家層を参会者として加えた場より遊興性を加味しながら変容し、「故実」に代わって「新儀」が定着すること、それが近世の家元制度の萌芽と認められることなどを明らかにした。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、七七五円

室町水墨画と五山文学

城市真理子著

岳翁と東福寺僧了庵桂悟の関係を手がかりに、詩画軸制作のありようを探り、雪舟と関連づけることで、周文の実像に迫ることを試みる。さらに禅僧の文人の営為を反映するものとして、周文筆と伝えられる詩画軸や煎茶図様の水墨画について考察する。

▼A5判・三三六頁／定価六、三〇〇円

阿蘇下野狩史料集

しもののかり

飯沼賢司編

阿蘇の西山麓に広がる原野、下野。そこで中世に行われた「下野狩神事」の史料である、永青文庫所蔵『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』とその関連文書、阿蘇家所蔵下野狩関連史料を翻刻。解題、用語解説を付す。

▼A5判・三一四頁／定価七、八七五円

【6月刊】

風俗絵画の文化学Ⅱ

松本郁代・出光佐千子・杉子女王編 虚実をうつす機知

絵画の制作に関わった人々の複雑に絡み合う視線の交錯を文化的に考察し、そこにあらわれた「機知」——虚実を往来する機微や感性の「かたち」——を明らかにしていく15篇。

▼A5判・四五〇頁／定価七、三五〇円

近世史小論集 古文書と共に

藤井讓治著

日本近世政治史研究の泰斗である著者が、研究をはじめたころからごく近年にいたる間に書いた小論のうち、あまり目にとまらないところに収められたもの、入手の困難なものの中で著者の主要な研究の前提、あるいはその後の展開にかかわる論考を集めた。

▼A5判・四九〇頁／定価六、三〇〇円

近世上方歌舞伎と堺

斉藤利彦著

佛敎大学研究叢書14

元禄期以降の、特に上方歌舞伎が特質を大きく転換した化政期から幕末期の実態を究明する。さらに上方歌舞伎の地域的展開や興行史的検討という観点についても考察するが、こうした課題に取り組むうえで重要な興行地として、堺を取り上げる。

▼A5判・三四八頁／定価六、六一五円

松岡恕庵本草学の研究

じょあん

太田由佳著

近世日本、本草学が博物学的に発展してゆくなかで一翼を担った、京都の本草家松岡恕庵（まつおか・じょあん）を主題に据え、その学問の実像に迫る。松岡恕庵の本格的な研究書。

▼A5判・三九〇頁／定価七、八七五円

一九世紀の豪農・名望家と地域社会

福澤徹三著

〔8月刊行〕

中核的豪農と一般豪農の経営レベルの比較、金融活動の分析を中心に、畿内・信濃の地域間比較の視点も加え、その生業・営為を近世・近代を通じて明らかにする。

※ 内容

- 序 章 本書の課題と構成
- 第Ⅰ部 一九世紀の畿内における豪農金融の展開と地域社会状況
- 第一章 近世後期の畿内における豪農金融の展開と地域
- 第二章 畿内の無担保貸付への私的所有権確立の影響
- 第三章 地域金融圏における地域経済維持の構造
- 第四章 幕末期河内の地域社会状況
- 補論 大坂本屋・正本屋利兵衛の「武鑑」「在方本」の出版活動
- 第Ⅱ部 信州における近世後期の金融活動
- 第五章 文化・文政期の松代藩と代官所役人の関係
- 第六章 近世後期の信濃国・越後国における豪農の広域金融活動
- 終章 本書の総括と今後の課題

ふくさわ・てつぞう…一九七二年生。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。現在、すみだ郷土文化資料館勤務。博士（社会学）。

▼A5判・三三〇頁／定価六、三〇〇円

畿内の豪農経営と地域社会

渡辺尚志編

近年整理が進められている岡田家文書を多角的に分析し、畿内における村落と豪農の特質を経済・社会構造の観点から解明する。

▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

近世社会と百姓成立

渡邊忠司著

佛教大学研究叢書Ⅰ

百姓の観点から百姓自らが創出した「成立」の条件と構造を年貢負担と村内の組織編成、質入の検討により解明。

▼A5判・三二〇頁／定価六、八二五円

熊本藩の地域社会と行政

吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編

近代社会形成の起点

近世地域社会論の成果と課題を踏まえて、西国大藩としての熊本藩領内の地域社会像を描き出す意欲的論集。

▼A5判・四二〇頁／定価九、四五〇円

幕末維新期の陵墓と社会

上田長生著

陵墓に政治的意味を付与し、祭祀を行おうとする政治権力（朝廷・山陵奉行）と在地社会の軋轢・葛藤が最も明確に現れた陵墓管理・祭祀に注目。

▼A5判・四〇〇頁／定価六、五一〇円

文人世界の光芒と古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

近代奈良の水木コレクションを分析。日本史学・考古学等を横断する一書。

▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

鉄道日本文化史考

宇田正著

「文化の鏡」としての鉄道から、日本人の内面的形成に果たした文化的役割を明らかにする。

▼A5判・三五二頁／定価五、七七五円

京都の歴史災害

吉越昭久・片平博文編

〔9月刊行〕

歴史上、京都を襲った災害を種類別にとりあげ、被災範囲や規模の復原、特徴や被害発生の社会的背景の分析、また人々の取り組みなどをさまざまな論に。地理学、歴史学、工学など多様な分野の研究者による、立命館大学 G・C・O・E プログラム「文化遺産の防災」プロジェクトの成果。

I 総論

歴史災害の復原から明らかにされる減災の知恵 (吉越昭久) 地理情報システムによる歴史災害の可視化 (塚本章宏)

II 水害

近世における京都鴨川・桂川の水害 (高橋学) 一七世紀後半における賀茂川の洪水と堤防の建設 (片平博文) 京都・鴨川の堤防建設にみる近世の治水観 (吉越昭久)

III 火災

近世京都の大火 (渡邊泰崇) 江戸時代の京都・公家町における災害と復興 (冷泉為人) 幕末の戦乱と火災 (奈良勝司) 大正期京都の火災の復原 (朝田健太) 京都市における歴史的建築物の火災履歴の復原 (田中峰義)

IV 震災

京都周辺の活断層からみた地震の環境と長期予測 (岡田篤正) 遺跡と史料からわかる地震災害 (寒川旭) 京都御所の地震殿と歴史災害 (川崎一朗) 近世京都における地震災害 (西山昭仁) 文政京都地震 (北原糸子・大邑潤三)

V 土砂災害

京都東山の土砂災害 (諏訪浩) 近代の水害と土砂災害 (赤石直美)

VI 気象災害・災害と社会

近世京都の重大火災と気象条件 (水越允治) 近代の医療と防災 (鈴木栄樹) 「迷子しるべ石」をめぐる (小林文広) (コラム執筆者) 山崎有恒、片平博文、伊津野和行、深川良一、中谷友樹

▼A5判・三〇〇頁／定価二、四一五円

京都大地震 文政13年の直下型地震に学ぶ
三木晴男著

文政一三年七月二日、京都を中心として震度六・四と思われる直下型地震が起った。建造物の倒壊、火災、流言と、公家・武士・町人を襲ったパニック。一五〇年前の地震が現代に語りかける教訓を、地震学界の重鎮が語る震災ドキュメント。

▼A5判・三三四頁／定価二、九四〇円

京都 高瀬川 角倉了以・素庵の遺産
石田孝喜著

近世京都の町づくりと経済的發展に大いに寄与した高瀬川に、限らない愛着と関心を持ち、歴史に埋もれた史料をねばり強く探索し研究を続けてきた著者が、運河開削の歴史をたどり、舟人や橋の変遷など、多方面からその歴史と文化を描く。図版多数。

▼A5判・二五〇頁／定価二、三二〇円

京の鴨川と橋 その歴史と生活
門脇禎二・朝尾直弘編

歴史都市京都のシンボルの存在である鴨川とそこに架かる橋について、各時代の様子を具体的に明らかにし、人々の暮らしの中でどのような意味を持っていたかを探る。

▼四六判・二五〇頁／定価二、三二〇円

近代地方政治と水利土木
服部敬著

淀川・安威川・神崎川の水利構造の変遷と分析、沿岸住民の治水運動と中央・地方議会と政党の対応、近代化の意味と中央集権の近代国家の性格を地域史の視点から問う。

▼A5判・四〇〇頁／定価六、九三〇円

阪神・淡路大震災と歴史的建造物
加藤邦男編

直下型大地震が招いた建築物被害のうち歴史的建築物の被害状況を把握し、被災地区における復興、復元、修理補強の方策を探るのみならず、文化財建造物の将来にわたる保全、利活用にさまざまな提言を示す。

▼B5判・二八〇頁／定価八、一九〇円

京都 伝統工芸の近代

並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編

【9月刊行】

京都における「近代」にあつて、美術・工芸がどのような変容をとけて現代にいたつてゐるのか。大きく「海外との交流」「伝統と革新」「工芸と絵画」「伝統工芸の場」の視点から、様々なトビックスや人物にまつわるエピソードを取り上げ概観する。口絵・関連地図や、各節には一目で年代を確認できる年表や関連図版を付し、視覚的にわかりやすく解説。

主な内容（各節より抜粋）

ワグネル／デュリ／佐倉常七・井上伊兵衛・吉田忠七／伊達弥助・中村喜一郎／近藤徳太郎と稲畑勝太郎／ジャカード・パタン／化学染料／機械捺染／輸出陶磁器／千總のビロード友禪／高島屋のビロード友禪／手描き友禪と型友禪／モスリン友禪／近代京都の漆芸／如雲社と後素協会／竹内栖鳳／黒猫会／飯面会／工芸品における「古代文様」／京都における古陶磁研究／琳派回帰／創作陶芸／前衛陶芸／河井寛次郎と民藝／千總と西村總左衛門／高島屋の下絵／神坂雪佳と図案／モダンデザインから捺染研図案へ／浅井忠／新井謹也／霜島之彦／津田青楓／京都府画学校／京都市立美術工芸学校と京都市立絵画専門学校／舎密局と染殿／織殿／京都織物会社／京都博覧会／内国勸業博覧会／祇園祭と時代祭／九雲堂／百貨店の展覧会 など

▼A5判・二九〇頁／定価二、六二五円

尾陽

第8号

徳川美術館編

徳川美術館による研究活動の成果。

【内容】建中寺所蔵の二挺の女乗物（小池富雄）／名古屋城西南隅櫓倒壊時期について（井上光夫）／新出史料「徳川家康自筆書状 福津松鶴軒宛」について（原史彦）／加藤清正書状 下川又左衛門宛（文禄二年）八月八日（中島雄彦）／シンポジウム「初音の調度の秘密」報告

【5月刊】

▼B5判・一二二頁／定価三、一五〇円

国際デザイン史

日本の意匠と東西交流

デザイン史フォーラム編

一九九九・二〇〇〇年に開催された「国際デザイン史フォーラム」（大阪大学大学院文学研究科美学研究室主催）をもとに、デザイン史における日本と西洋諸国との交流を探る五六篇。

▼A5判・三二〇頁／定価三、〇四五円



みやこの近代

丸山宏・伊従勉・高木博志編

京都大学人文科学研究所「近代京都研究会」で論じられたさまざまな分野の具体的な主題をもとに、近代現代の京都の根本問題を見通す視座を形成しようとする試みの八五篇。『京都新聞』の連載を再構成したもの。

▼A5判・二六八頁／定価二、七三〇円



近代京都研究

丸山宏・伊従勉・高木博志編

本書は、京都という都市をどのように相対化できるのか、普遍性と特殊性を射程に入れないが、近代史を中心に分野を超えた研究者たちが多数参加し切磋琢磨した「近代京都研究会」の成果。

▼A5判・六二八頁／定価九、四五〇円



近代日本の倫理思想

主従道徳と国家

高橋文博著

【9月刊行】

近代日本における倫理思想の特質とは何か。
本書は、西村茂樹・福沢諭吉・阿部次郎・安倍能成・和辻哲郎ら近代日本の思想家や、修身教科書を取り上げて考察した論文を集成。前近代よりもち越され、主張され続けた主従道徳の存在に着目し、倫理思想における日本の近代と近代以後の意味について考える一書。

目次

- 第Ⅰ部 近代の立ち上げ——知識人たち
 - 第一章 明治十年代の道徳教育
 - 第二章 徳育論争における福澤諭吉
 - 第三章 道徳教育における主従関係の近代
 - 第四章 近代日本における経済と倫理
 - 第五章 阿部次郎の社会思想
 - 第六章 安倍能成と平和論
 - 第Ⅱ部 近代の語り直し——和辻哲郎
 - 第一章 アジアの中の日本
 - 第二章 自然のあり方は「人間の有り方」
 - 第三章 天皇・武士・民衆
 - 第四章 和辻哲郎における敗戦
 - 第五章 和辻哲郎の戦後思想
 - 第Ⅲ部 西村茂樹文献解題
 - 『泊翁卮言』／『往事録』／『校正萬國史略』／『輿地誌略』／『求諸己齋講義』／『檀寧氏道徳學』／『理學問答』／『希穀氏人心學』／『可吉士氏心象學摘譯』
- たかはし・ふみひろ……東京大学大学院人文科学研究科博士課程（倫理學）単位取得中途退學。博士（人文科學、お茶の水女子大学、岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）。
- ▼A5判・三三二頁／定価五、七七五円

増補改訂 西村茂樹全集

古川哲史監修／日本弘道会編「全12巻・既刊11冊」

明治に急激な近代化・西洋化が進む中、保守主義思想家として倫理・道徳の問題に取り組んだ西村茂樹。その学問的な業績を中心に構成し、これまで未発表の論説や『日本道徳論』の初版本など思想的にも貴重な著書も含めて公刊。道徳学、哲学、論理学、社会学など、西村思想の真髄に迫る。

【4月刊行】

第8巻 訳述書4

▼A5判・八一八頁／定価一八、九〇〇円
既刊11冊揃定価二〇四、七五〇円

韓国「併合」前後の教育政策と日本

本間千景著

佛敎大学研究叢書⑧

韓国併合前後の、修身教科書への影響や教員の養成・日本人教員の配置など、現地における学校教育をとりあつかう。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、八八〇円

明治期における不敬事件の研究

小股憲明著

二二八事例と一三参考事例の概要および参考文献を収載。豊富な実例を整理・検討することによって明治国家の特質を考察する。

▼B5判・五七六頁／定価一三、六五〇円

近代医療のあけぼの

青柳精一著

幕末・明治の医事制度

第24回矢数医史学賞（日本医史学会、2012年）受賞！

長年医療ジャーナリズムに従事してきた著者が、幕末・明治の医事制度と社会背景について膨大な史料をもとに考証する。

▼A5判・五七六頁／定価四、九三五円

比較詩学と文化の翻訳

川本皓嗣・上垣外憲 編

大手前大学比較文化研究叢書 8

◆国際比較文学会（ICCLA）会長であった故アール・マイナー氏の追悼と、同じくICCLA会長を務めた川本皓嗣・大手前大学前学長の退職を祝うため、各国から集った研究者の共同論集。

【7月刊行】

◇内容◇

まえがき 川本皓嗣（大手前大学学術顧問）／序章 スティーヴン・ソンドラップ（ブリガムヤング大学教授）【川本玲子訳】

第一部 比較詩学

あやめも知らぬ 川本皓嗣／不忠な美人（Belle infidèle）孟華（北京大学教授）／陳凌虹訳／漢俳三十年 王晓平（中国天津師範大学教授）／穆木天の前期詩論における日本の影響 王中忱（中国清華大学教授）／翻訳はいかに骨折するか、あるいは骨折をどう翻訳するか 稲賀繁美（国際日本文化研究センター教授）／沖繩民謡「ていんさぐぬ花」と「アルカードルトのアヴェエマリヤ」上垣外憲一（大手前大学教授）／比較関連におけるノルディック・ケニングング スティーヴン・ソンドラップ【森道子訳】

第二部 文化の翻訳

インスターカルチャー ユージン・オーヤン（インディアナ大学名誉教授）／「山中由里子訳」仏教のジェンダー平等思想 植木雅俊（東京工業大学非常勤講師）／東アジア獅子舞の系譜 李応寿（世宗大学校教授）／涙壺を求めて 山中由里子（国立民族学博物館准教授）／あとがき 上垣外憲一

▼A5判・二八〇頁／定価二、六二五円

翻訳文学の視界

近現代日本文化の変容と翻訳
井上健編

明治維新後の日本にとって翻訳は、西洋文明に学び、近代国家の骨格を整えるための国家的事業であった。外国文学の翻訳は近代日本文学の形成に大きな影響を及ぼし、そして今日、すべての日本現代文学は、執筆される時点で翻訳されることを想定しているといえよう。

直訳と意訳、翻訳者の役割、原作者の言語意識……。言語が自国文化と深く関わる以上、翻訳文学はつねに複雑な要素をはらむ。最前線で活躍中の研究者たちが、比較文学・比較文化研究の立場から翻訳文学の諸相を語り可能性を探る。



第一部 近代日本の翻訳文学

明治二〇年代の翻訳と日本近代文学の《生成》（山田潤治・大正大学専任講師）／魔術的ファンタジーとSFの交叉点——春浪・アラビアンナイト・ヴェルヌ——（私市保彦・武蔵大学名誉教授）／リアリズムの翻訳 翻訳のリアリズム——柏木隆雄——（大手前大学副学長）／文学の翻訳から翻訳文学へ——昭和初期のヘミングウェイ、ブルースト翻訳を事例に——（井上健・東京大学教授）

第二部 翻訳者の役割

現代語訳の日本語——谷崎潤一郎と与謝野晶子の「源氏物語」訳——（中村ともえ・静岡大学講師）／翻訳におけるジェンダーと《女》の声の再生——ZoraからKikuchiまで——（金志映・東京大学博士課程）／翻訳者の透明性について——村上春樹訳「クレーメント・ギャツビー」をめぐって——（上西哲雄・東京工業大学教授）

第三部 翻訳文学の位相

世界文学としての翻訳文学——ゲーテ、マルクス、シュビッツァ、モレティ——（フーリントン不破直子・日本女子大学名誉教授）／翻訳の詩学・詩学の翻訳——近現代日本詩歌の英訳を中心に——（リース・モートン・東京工業大学教授）／原作者に「から」——「ポルヘン」・「日本大学教授」母語の外に出ること、エクソフォニーの可能性をめぐって——多和田葉子と《翻訳》について——（依岡隆児・徳島大学教授）

▼A5判・三〇〇頁／定価二、六二五円

世界を巡る美術探検

木村重信著

〔7月刊行〕

和・漢・洋中心の美術史に一貫して異を唱え、民族芸術学を提唱してきた著者が、北極・南極・シベリアを除く、世界のほぼ全域で行ったフィールドワークのルポルタージュ。35の地点や地域をとりあげる。あるときは芸術性があるときは宗教性が、またあるときは旅そのものがメインになるように切り口を変えて綴る、世界美術への招待。

【内容】

- I ヨーロッパ 水河時代のテラコッタ製女性像／死を象徴する巨石モニュメント／立体派的なスラッゲ青銅彫刻／古典的半裸体の擬古作／古代ギリョウ彫刻の復活／ハンザ同盟時代の美しい街並みほか
- II アジア 歴史を覆す王像(?)の発見／イシユタル門、空中庭園、バベルの塔／ヒンドゥー教の男女両性具有神／故宮博物館名品の特別展示／「祇園精舎」と考えられた寺院(ワット)ほか
- III アフリカ 優美、端正なクレオパトラ浮彫像／プレスター・ジョンの国／ムザブの谷にひろがるキュビズム風建築／華美、幻想的なシンペレ壁画／華麗な衣服を着る、オシヤレなヘレロ人ほか
- IV オセアニア J・A・ミッチェナー「南太平洋物語」の舞台／温泉地に渦巻くマオリ模様／アポリジニの木彫と樹皮画ほか
- V アメリカ 不思議な地上絵とユニークな工芸／南北アメリカ最大の古代都市／日干煉瓦(アドベ)の多層アパート式住居群／北西海岸先住民美術の過去と現在／フランス風のジャズ発祥地ほか

きむらしげのぶ：京都市立芸術大学教授、大阪大学教授、国立国際美術館館長、兵庫県立近代美術館館長、兵庫県立美術館館長など歴任。文学博士。毎日出版文化賞、大阪文化賞、兵庫県立美術館館長など歴任。文学労賞、兵庫県文化賞など受賞。著書多数。

▼A5判・三〇八頁／定価二、五二〇円



木村重信著作集

〔全8巻〕

原始美術から現代美術までの広範な業績のなかから再編成された著者自選の著作集

- ①美術の起源 ②はじめに イメージありき
- ③美術探検 ④民族芸術学 ⑤世界美術史
- ⑥現代美術論 ⑦美術評論 ⑧生活文化論

① 定価八、九二五円 ②～⑧ 各定価九、九七五円 揃定価七八、七五〇円



着衣する身体と女性の周縁化

武田佐知子編

〔4月刊行〕

着衣という共通の素材を通して、さまざまな社会におけるジェンダーのあり方を考察。グローバルな視点から、衣服と身体表象について解き明かす26篇。

▼A5判・五〇〇頁／定価六、〇九〇円



布がつくる社会関係

金谷美和著

インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌を視点に社会を分析することで文化人類学的研究の新たな可能性を拓く。

▼A5判・三三〇頁／定価六、五一〇円

北太平洋の先住民交易と工芸

大塚和義編

交易ルートの実態を明かし、先住民の生活と産業を豊富なカラー図版で紹介。

▼A4判・一五〇頁／定価二、九四〇円

美の縁

び

よすが



守一は、授業中窓の外で木の葉がひらひらと舞うのを飽きもせずじつと見ているような子供だったという。「ひたすら見続ける」という生活を、九七才と四ヶ月で亡くなるまで続けた。夜の風景を描いた作品は《宵月》（一九六六年）が知られているが、それから五年後に描かれた本作の画面からは月も樹の幹も姿を消し、描かれているのは枝から下がる葉だけである。黒く塗り潰された逆光状態にある葉は遠くに輝く白い月の存在を暗示するが、九一才の守一はそれすらも画面から削ってしまった。「見る」という経験を蓄積する程に対象への詳細な描写は消えていき、抽出された本質だけを描く極めて簡潔な作風になっていた。



宵よい



熊谷守一くまがいもちかず

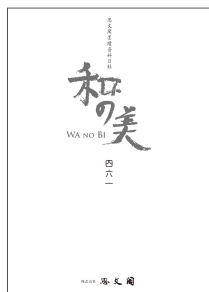
特徴的な「太い輪郭線」が画の中に出現し始めたのは一九三九年頃、還暦を迎える間際のこと。輪郭線で区切った内側を鮮やかな単色で平らに塗りつぶすという「モリカズ様式」は、その後時間をかけてゆつくりと完成されていった。

本作が描かれた一九七一年以降、それまで最初に赤鉛筆で描かれていた輪郭線は黒い木炭へと変わり画中に静かに沈み込むようになった。画面をパツパツと分断する線は鍛え抜かれた銅のような強靱さを持つが、そのわずかなふるえからは、長年見つめ続けた自然に対する画家のこまやかな愛情が感じられる。

（思文閣編集部・山田理恵子）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

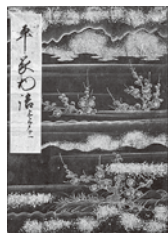
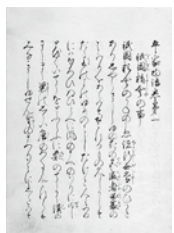
お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



平家物語 全十二帖

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

美術品を売る、買う。

「思文閣大交換会」が
いちばんの方法です。

思文閣大交換会は、年4回の大入れ会。
美術品を売りたい方、買いたい方双方に
ご満足いただいております。

詳細・お問い合わせは

思文閣京都本社

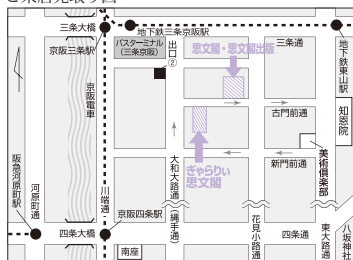
TEL (075)531-0001

mail info@shibunkaku.co.jp

ぎゃらりい 思文閣

ぎゃらりい思文閣では、「ようの美」をコンセプトに、陶磁器や漆器など様々な分野の工芸品を取り揃えています。また、現在活躍されている多彩な作家の個展や企画展を随時開催しています。ぜひ一度お立ち寄り下さいませ。

ご来店見取り図



〈京阪〉三条 〈地下鉄東西線〉三条京阪下車
(出口②) 徒歩約3分 〈市バス〉三条京阪

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386
TEL(075)761-0001 FAX(075)533-1779
<http://www.shibunkaku.co.jp/gallery/>
galleria@shibunkaku.co.jp